平林たい子全集

3

潮出版社

平林たい子全集 3

昭和52年4月20日　印刷
昭和52年4月25日　発行

著者・平林たい子
装幀・伊藤憲治
発行者・島津矩久
発行所・株式会社 潮出版社
東京都千代田区飯田橋3－1－3
電話 東京(03)230－0741(販売部)
230－0781(編集部)
郵便番号 102
振替 東京5－61090

印刷 第一印刷株式会社　製本 株式会社鈴木製本所

© 1977 Shinko Teshirogi　Printed in Japan
乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします

目
次

一人行く……9
野の歌……26
盲中国兵……36
うた日記……40
桜の下にて……45
良人・妹……53
ある女についてのメモ……59
美人……65
彼女の履歴……73
お手々つないで……83

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

こういう女……93
鬼子母神……126
冬の物語……132
この結婚……145
あこがれ……158
彼女の訪問……166
下婢……176
黒札……186
私は生きる……208
涙……219

春悲しく……222
台所の歌……234
堕ちた人……240
母……245
人生実験……251
青空の下で……273
キヨ子像……281
牝鶏……294
白髪……300
女の悲しみ……305

地底の歌……313
女の生き方……413
ばくち場……424
女親分……431
愛情というもの……446
女掏摸……452
解説・円地文子……462

平林たい子全集

3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一人行く

かにかくに与えられた。この病躯を横たえるに足る一畳の畳が。

この場合、背の下の一畳の畳の平坦さとは、永遠の大地の広さと重さとにも比べられて、ただただ感謝と満足とで、我と我が胸が金色に光っているように思われた。

それに訪ねて行けるわけではないにしろ、F子さんの所まで乗換なしのバスで通じて居、夫のいる警察にも近いということは心慰まるべきことに思えた。

病室は畳敷きの三人部屋で、七月午後の陽が金屏風を立てたように窓で輝いていた。

しかし、その光が射込む熱気よりも激しいものがらんらんと私の心の中には燃えていた。或は肉体に灼けている熱が肉体と隣合わせた私の心をたえず焙っていたせいだったかも知れない。

私は外来の診察室でといたまま持って来た帯と帯揚げとを、枕元に置き明石の着物の前をひらいて大きい腹の上に看護婦が熱い湿布を置くのを見戍っていた。傷いた獣の様な目で。その目が血走っているのが眼底の熱でよくわかった。

ここへYさんが私をつれてくる前にかけた電話で私の余儀ない身の上は多くもない看護婦達にすっかりひろまっているらしくこの看護婦も万事含んでいるという余裕を見せながら、露き出しの顔を汗粒だらけの胸のそばまでもって来て、

「お寝巻になすっちゃあいい着物が勿体ないですわね」

とやさしく言った。しかし私はそのやさしさに答えようともせず、

「着物なんぞ問題じゃありません」

と思わず口走った。

眼の底ではただ一つのことを、それが私の心の視線で自然発火しそうなほどに、じっと凝視している心地だった。

看護婦はとてつもなく甲高い楽器にさわってしまった様な呆れた顔で一寸私を見つめた後、蒸気の立たなくなった洗面器をもって出て行った。

間もなく院長O氏と話していたらしいYさんが戻って来て寝巻と布団は貴女の親類から持ってくるように、これから役所へ戻ったら近所の交番まで言伝(ことづて)してあげること、その親類が来たら、付添人について相談するがよいということなどを手短に言った。

この場合その親類が家族の必要だけの布団ももたないことなどは言うべきではなかった。私はただ感謝の面持で重苦しく答えたが、思いがけない人の情が酒より強く身にこたえて、感謝の放恣に慣れて来た心はむしろ苦痛を受けた

様にさえ疼くのであった。

Yさんは、安心した面持で帰った。

とうとう私は、警察で通り一遍の知合にすぎない警察官のYさんの腕に千鈞の重味でぶら下ってしまった。しかし、自らの重量を自ら吊上げずに、他人に任せることは、何と安易なことであろう。

やがて、窓を威嚇していた西陽も柔かな鬱金に変りどこかで食膳の音がする頃になるとさっき呑んだ粉薬のせいかふれ合う瞼の熱もさめて来たらしかった。

地面を掬って精製したようなあの粉薬にもこれだけの慈愛がこもっていたとは。私は、血管の末梢で「静かに、静かに」と激する血潮を鎮めているあの粉薬の作用を子供の様に想像し、その微粒の最後の一微粒の作用までをあまさず享けようという闘病の初心者の心理にやっと入り込むことができたのであった。

心も体も落ちついた目で眺めやると、私の隣には盲腸炎の予後がこじれたらしい十二三の少年が母親に看取られて居り、色紙で折った蟬や鶴などが糸で吊下った暮色のなかに小さな角度と面の多い明暗を染めていた。そしてその隣には、ひどく鼻梁の高い女が刃物の様なその鼻梁で向う側の半顔をかくして仰向けに寝ていたが、腹のあたりには、布団や衣類を患部に触れさせないために心持上げておく櫓が跨いでいた。

先程からきくともなく耳に入った他室患者の噂や窓に干してある長尺のガーゼなどから推してどうやらこの病院は外科病院ではないかと思われた。

暫しの間はそれをたしかめるのも億劫であったが、枕元の薬瓶の文字を見るとはたしてそうだった。

よろしい、外科病院でも花柳病科病院でも——今まで大病をしたことがなく医者とか病院とかについて漠然とした注意しか払ったことのない自分には、内科患者が外科に見て貰うのは、相当な場所錯誤のように思われた。だからこそ自分の気持にいささかのはずみをつけて、そのようにつぶやいたのであった。

外科と内科とがよしんばバルト海に向った河と印度洋に向った河ほどにちがった流であったとしても、自分は必ず、努力と克己とによって、生命の海に流れ合ってみせよう。

生命。自分の生命の向背を真剣に考えなければならない病気にとりつかれてから、生命の大いさは地に手を突いて伏して哭してもよいほど私の身に泌みた。

ことに、長い間留置場の高窓の下にいて、見るものとてその窓を過ぎる日々の天気のほかは、自分の心の内面しかもたなかった孤独な私は、自分の生命力にすべての希望を託するような偏倚した激情を経験した。誰も縛することのできない生命、錐のようなその力で、復讐のために何枚もの厚いものを徹して行く生命。それを鑽仰する激情が、逆にまた病む体を燃え滅らし、その体の衰えが、焦躁の鞭となって心の駒を鞭った。

しかし、堅固な復讐の城塞と思えたあの留置場の二畳も今は失われた。そしてあの中で思ったことや企てたことも大部分色褪せてしまった今、自分の生命の力も天翔ける力を失ったことを私は感じないではいられなかった。

私は急に陶酔からさめたようにさっき診察室で院長が駈け引きなしに「これはひどい、これは全身結核と言ってね――」とその特徴を説明したあけすけの言葉や「心臓の雑音も相当ですよ。これで今少し自動車を乗廻していたらどういう事になったかな」

と言った嚇かす様な言葉などをこまごまと甦らせた。それには、勿論救済者という派手な立場を尚彩ろうとする罪のない誇張はあったにしろ、回転椅子に掛けた私の裸の背をはっしはっしと打つに充分な圧迫的な内容があった。灼けていたあの時の心と体とには、その言葉の打擲はむしろヒリヒリと薄荷を塗ったように快かったが、今となっては、多少の疼きとなって思出されるのであった。

彼は言った。両肺が侵されていること、腹膜の炎症も殆ど腹部全部にひろがっていること、何箇所かにもう癒着ができかかっていること。その癒着の場所に院長の手がさわる度に私は吐気を催した。

それらの症状の中で、何と言っても私の心に強くひびいたのは、両肺が侵されているという宣告であった。「異常な音がする」と言われた瞬間から私は胸底の痛々しい傷口に外気を触れさせない為の様に思わず浅い呼吸をする様になった。そして脆弱になった神経の赴くままに、その音は呼吸の洩れる音ではないかと密かに想像した。

「その肺は、ひょっとすると、長く着た着物の膝などが摺り切れるように摺り切れかけているのではあるまいか。私は生れて以来、何億回となく呼吸させて貰ったのだから、その摩擦だけでさえ肺が破れてしまったとしても不思議はないし恨む筋合はないかも知れない……」

私は己れが空しくなる程の謙虚さをもってすべてを受入れようと思い、そっとこんなことをさえ思った位だった。

しかし、そういう諦めと並行して「いっそ腹をあけて、この水をとるという方法もあるにはあるんですがね……」

とさっき院長が言った言葉の尻がまだ不消化のまま幾らかの未練となって胸に閊えていることも感じないでは居られなかった。

私は生きたい早く治りたいという病人一般の希求のほかに、糸を紡ぎ紡ぎのばして行くような、日常的な闘病は一日も許されない身の上から来る焦燥に迫られていた。

肺は仕方ないとしても、腹膜炎だけでも治せばせめて歩くことができる。いや、そんな小さなこせこせした都合からばかりではなく、実は卑下や悲哀の皮を一と皮ずつめくった腹の底に「病気に罹った人間は癒す権利があるのだ」という傲岸で不遜で時と場合もわきまえざる図太い思想が陰見していることを、自分でも些かは当惑し覚めていたのであった。

私は健康な頃不用意な見舞人として、やせた結核患者が魚の様に並んでねている施療病院の重症室を幾度も訪問したことがあった。彼等の命の糸は、電球の中のタングステンよりも微に、少しの生命力の燃焼に堪えずに切れてしまうかと思われる程細っていた。こみあげる咳を見てさえその命の危急かと思うような恐しさを覚えた程だった。

その彼等の枕元の台にのっているものは、薄黄色の水薬と三角に折った紙の中の一匙位の散薬に過ぎなかった。彼等はもう何ケ月も熱をさますために散薬をのみ、胃の消化をよくするために水薬をのみ、たまには湿布などするだけでむらがる根強い病菌に立向っているのだった。いわば肉体のみから間接的に病菌を嚇かしたり、合図を繰返したり地表から地底に水が泌みて行くように水分の作用が患部へ泌み込んで行くのを待つという根気よい方法をとっているのであろう。

医学知識のない私にもそれが緩慢な大迂廻戦術であることだけは判断できた。そして、一体、人間をかくも家来の如く忍耐強く仕えさせる結核菌とは、そも何者だろうかと思い、それはどこにでもいるという点、そのくせ目には見えないという点で「神」という存在と似ていることを滑稽なことに思った。

だが、今にして思えば、彼等は医学の無為と貧富という浮世の摂理とに対してかくも忍耐づよく堪えていたのだった。それにしても、「結核を治す薬はない」と未来の予測まで含めて断言する世の医者の懐疑のなさは何と苦々しいものだろうか。同じ時代の同じ世界で、軍艦や爆弾の製作の上では、多くの荒唐な空想が、科学として実現されていることを、私は切実な比較として考えてみずには居られなかった。「そこにも時代の犠牲者がいるのだ。自分も、これからそのお仲間入りをするのだ」

と私は悲壮な感慨に打たれてつぶやいた。そしてそれやこれやの想念の末に、

——治る治らないは問題じゃない。治ろうとする努力の過程にこそ価値があるのだ——

という情ない箴言のような声が天の一角にひびくのをきいたときには、目を煮るほどのあつい口惜しい涙がとめどもなく溢れてくるのをとどめることができなかった。

その前年の十二月、私は夫と一緒にいた警察から一人だけ分けて東京の郊外にある小さな警察に移された。足袋も櫛も使うことができず便所に行く回数も制限されているような留置場ぐらしも、夫が向うの監房に見えていたからこそ何程か慰まったものを、私がよく夫の監房の方を向くという看守の報告によって、この警察に移した。じきに正月となり、窓外には、オレンジ色の陽が照って戦勝気分の行進曲や、好景気を語る自動車の警笛がひびいたが、異様な沈黙の領したこの建物の中は、ピシピシ音のする寒気で、水道の氷柱は錐のように下った。

私は寒気の特に甚しい日には、自分もふるえながら持病のある夫の上を思って絶望した。敷いている莫蓙以外すべて鉱物質で出来上った夫の留置場は、離れて思えば冱寒の氷窟としか泛ばなかった。自分の見戍っていない所では、何か夫の上に不幸が起るという危惧は、取越苦労の多い私の習性ともなっていた。愚かしくも私は、たまに夫のいた留置場から出た小犯罪者がここへ入って来るのを一つのたのしみとして待った。

そういう私自身は、何度もつづけて風邪をひいたが、気持をいっぱいに塞いでいるさまざまな問題に煩わされて、いわば肉体は空家のような空けっぱなしの不摂生に晒されていた。その隙間からこの病気が入り込んだ。或は、私の中に眠っていたその病気が不摂生に揺り覚まされて、目覚めたのかも知れなかった。

毎日微熱はつづいたが、私は大して気にもせず冷水摩擦を行った。朝雑役が絞ってよこす半切の手拭がどうかすると凍って、ひろげるときしんしんと音のするのをつかんで加持祈禱師の女のような形相で全身を摩擦した。喚くことも罵ることも笑うこともできない生命のすべての衝動の捨場は朝のこの行事一つにあるのだった。

もとよりこういう場所にいては、カラリと気分のよい日は日本晴の日よりも少なかった。こういう境遇に敗北すまいとする知らず知らずの習慣から毎日の努力はその不快を気にすまい気にすまいという方向に向けられて、結核の最初の微細な徴候を取り逃がしたものに相違なかった。

その頃、私は、警視庁から出張する役人に調べられていることになっていたが、はじめから調べるべき犯罪事実のないことは彼にとっても世話のないことであった。

「そっちの窓の所で本でも読めよ。俺はここで一寸睡るから」

と彼は言って机に肱を突いて一睡りしては帰って行った。思想犯罪者に小さい奇蹟を現してくれる「転向」という懺悔も、懺悔すべき事実のない所では致し方もなかった。私は改悛の情がないというこの警察からの情報にもただ任せておく外なかった。極東に大帝国を現出せんとする軍部や思想家の法案は、そのずっと前から誰の目にも明白であった。その案が強行する轍の下で、種々な組織や思想が音を立てて打砕かれた。二十九日以上の拘留は考慮して建ててない留置場が種々な思想者の収容所と変った。彼等は思想者が困憊して自分の思想に踏絵をするまで泥棒や賭博師と一緒に毎日壁の一点を凝視させておくのだった。時々混み合って坐れない時には、半数の人間だけ立たせて、夜中それをつづけた。

「刃の錆になりますかな」

と固い決意を眉宇に現した天理教信者もいたが、よい待遇にありつくためには、巡査の靴を磨く学者もいるのだった。

「待っている人もない所へ、早く帰って行っても仕方ない

から」

私は、いたって控え目に、自分の決意を表明する外なかった。実際おかしい。私はその二畳に住みついて、夜は寝巻を着、昼の着物をたたんで寝押しをするほど日常的になって居た。戦争が終るまでは――という見透しからすればまだまだ長い滞在をひそかに私は期して、すべての気持を小出しにすることに努めた。強いて言えば私の災難は偶然とは言えず、十八歳にして親のもとをはなれた時からいわばこれらの受難は覚悟して自分の道を歩んで来たのだった。

やがて春が訪れて高窓に射す布片ほどの日ざしも自然の愛情が甦ったかのような感激だった。同じ窓枠に毎夜見る星が潤んで来たのさえ何という慰めだろう。頑に閉ざしている私の気持とはかかわりなく、髪は脂気で柔くなり着る着物の体臭も自分でさえわかるのだった。看守にたのんで風呂敷の春着を出すにつけても、着物の世話をする人がないであろう、夫の身の上はやっぱり私の胸を暗くした。

その頃私は夜の咳になやんでいたが、木の芽の巻葉をひらかせる柔い一雨が十日以上もつづいたあとでは、昼も咳き込むようになった。

その年は、それからずっと雨が多くて豚が流されたという報告が警察に来た程だった。私の咳はひどくなるばかりで、全く、肉体の奥の奥の方に押えつけられている何者かが、やむにやまれず飛出して来ると言った勢だった。

咳がとまると熱が一時に騰った。しかし熱は咳ほど苦しいものではなく、私はむしろ、毎日珍客でも迎えるような気分でその襲来を待つ倒錯した境地にあった。

実際体力もさして衰えぬ体にひそひそと熱がさして来るときは、色あせた三十すぎの肉体も充実し身内には滑りよく速い脈行が酒のようにあつい血液を湛えて駈け廻った。

しかし、熱が下って日常の感覚が目覚める朝や深夜には、言いようもない気持の迷路をさまよった。自分の生涯の道として選んだ無産者運動には、顧みて足らぬことは数々だったが悔はなかった。だが滑りよいタールが敷いてあるようにすべての思いの末が滑り込む夫婦間の問題となると、悔や悲しみがこんこんと湧いた。それは心を柔にしてくれるように溢れてくる甘い涙でぼやかされているとはいえ、未来永劫にわたって解き得ない一つの絶望的な結び目をもっているかとさえ思われた。

互に夫とよばれ妻とよばれて、向う三軒両隣と大差ない勾配の屋根の下に生活をかまえながら、私達は、妻が腰かけて夫が立っているよくある写真のようなのどかな一番いであった日は一日もなかった。

夫と妻をとりまく内外の大きい問題をはじめとして時には家の中で今晩は誰が蚊帳を吊るかという問題でまでありきたりの習慣を措いて一応根本から原則を検討してみなければすまないような溢れる感情の精力をもって向い合った。

しかしまた別な見地で見れば瀑刺とした精力の結果として、二人が分ち合う日々の感情は泉が今湧き出して今流れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com